

## 初年次学生による小論文の構造分析に関する考察

Study on structural analysis of Academic Writing written by first-year students

杉本 亜由美

金沢学院短期大学現代教養学科

Ayumi Sugimoto

Department of Liberal Arts, Kanazawa Gakuin College

10 Sue-machi, Kanazawa-shi, Ishikawa, 920-1392 Japan

キーワード：初年次教育，アカデミック・ライティング，構造分析，評価基準，アウトラインシート

Key words : First-year education, Academic Writing, Structural analysis, Valuation standard, Outline sheet

### 抄録

学生が学術的な文章を書けるようになるには、文章全体の根本を成す骨組み、所謂、序論・本論・結論という文章構造内で書くべき項目とされる構成要素について理解する必要があると考える。本研究では、この構成要素に焦点を当て、論文に記すべき構成要素を明確にした上で、初年次学生が執筆した課題論文全体の中に必要な構成要素がどれくらい存在しているのか、また、その記述内容を数値化し論文の文章構造面の特徴や問題点を明らかにした。

本研究では、6回のアカデミック・ライティング授業内で3編の小論文（小論文①，小論文②，小論文③）を執筆し、小論文②と小論文③においては、序論・本論・結論で何を書くのかを文字化できる「小論文アウトラインシート」を使用した。小論文3編全体の文章構造分析を行った結果、序論「問題提起」と結論は、執筆回数を重ねる度に明確に表現できるようになり、特に序論「問題提起」に関しては「小論文アウトラインシート」の効果が確認できた。しかしながら、本論「客観的データ解釈や考察」、「自身の意見の提示」の表現に課題が残ることが明らかとなった。これらの課題はOECDのPISA2018読解力低下に繋がるものであり、課題を克服すべく、読解力リテラシーを身に付けるための授業デザインの構築を思案すべきであると考えられる。

### 1. はじめに

高等教育機関で学生が身に付けなければならない能力の一つとして、論文やレポート作成時に必要となる、アカデミック・ライティング (Academic Writing) 力が挙げられる。アカデミック・ライティングとは、「学術的文章の書き方」を指すが、高等教育機関で学ぶ初年次学生にとって論理的な文章を書くことは、留学生はもとより、日本語を母語とする学生においても決して容易ではないことと思われる。

日本語を母語とする初年次学生 60 名を対象に筆者が実施した事前調査 (2022 年 4 月実施) では、高等学校で文章表現について学んだことがあると回答した学生が 6 割程度、文章を書くことに興味があると回答した学生が 4 割弱、文章を書くことが苦手だと回答した学生が 9 割以上いた。しかし、

論理的な文章が書けるようになりたいと前向きな回答をした学生は 9 割以上と、ほとんどの学生は自身の文章力に自信が無いが、将来的には論理的な文章が書けるようになりたいと思っていることが分かった。また、文章を書くことが苦手だと回答した学生に、その理由について聞き取り調査を実施したところ、全員の学生が、「何を書けばいいのか分からないから」、「書いているうちに頭が混乱してくるから」と回答していた。

学生が学術的な文章を書けるようになるためには、文章全体の根本を成す骨組み、いわゆる、序論・本論・結論という文章構造内で書くべき項目とされる「構成要素」について理解する必要があると考える。本研究では、この「構成要素」に焦点を当て、論文に記すべき構成要素を明確にした上で、構成要素別に何を書くのかを可視化する「小

論文アウトラインシート」を使用し、その効果を検証した。また、初年次学生が執筆した課題論文全体の中に必要な構成要素がどれくらい存在しているのか、また、その記述内容を数値化し、論文の文章構造面の特徴や問題点を明らかにすることで、「小論文アウトラインシート」を用いた論文構成指導案の提示に繋がりたいと考えている。

## 2. 文章構造分析に関する先行研究と本研究の位置づけ

初年次教育に含まれるアカデミック・ライティング教育に応用することを最終的な目的として、さまざまな日本語文章を対象にした構造分析研究が行われているが、そのほとんどは、序論や結論のみの部分的分析に留まっている。ここでは、文章全体を分析している、浜田ほか(1997)<sup>[1]</sup>と脇田(2012)<sup>[2]</sup>を挙げる。

浜田ほか(1997)<sup>[1]</sup>は、大学生および留学生が論文を書く際に参考となる演習テキストとして、論文の組み立て方、論文を書くために知っておかなければならない言葉のルール等が丁寧に述べられている。さらに、序論・本論・結論の3つの順序で論文全体の書き方が練習できるように、構成毎に述べられるべき要素が明確に設定されており、指示に従って書き進めることによって、論文を完成させることができるように述べられている。

レポート文全体の文章構造分析を行っている先行研究としては、脇田(2012)<sup>[2]</sup>が挙げられる。脇田(2012)<sup>[2]</sup>では、日本語を学ぶ学部留学生が執筆した15のレポートの文章全体の構造分析を行い、序論・本論・結論に必要な構成要素を設定した。それを元に理想的なレポート構造と評価の低いレポートの問題点を明らかにした上で、レポート作成指導案を提示している。

上記の先行研究は文章全体を分析しているが、同じ学生が執筆した複数の論文内容の全体を比較考察しているものは、管見の限りほとんど見当たらない。本研究では、上記の先行研究を参考に設定した構成要素、評価基準をもとに、授業内で執筆した3編の小論文の序論・本論・結論における構成要素の有無、その内容の良し悪しを得点化、比較し、文章構造面の特徴や問題点の明確化とともに授業効果を測定することとした。

## 3. 分析方法

本研究は、小論文に記述すべき構成要素を定め、構成要素別に評価基準を設定し、それらに則して各小論文を数値化して分析する。本研究における構成要素とは、小論文の各構成部分において、学生が最も伝えたい意味内容を述べている要素とする。先述した浜田ほか(1997)<sup>[1]</sup>、脇田(2012)<sup>[2]</sup>を参考に定めた、本研究における構成要素7つと、その下位要素を以下に示す(表1)。また、表1にある、1.背景説明から7.結論提示において、それぞれテーマに沿って分かり易く明確に述べられていれば3ポイント、テーマに沿って述べられてはいるが、具体性に欠けているならば2ポイント、述べられてはいるが、テーマとのズレが認められるならば1ポイント、全く述べられていない場合は0ポイントと評価基準を設定し、小論文を得点化するための評価シートを作成し(表2)、これを使用した。分析対象は、初回授業で執筆した小論文①、3,4回目の授業で執筆した小論文②、5,6回目の授業で執筆した小論文③とした。

表1. 序論・本論・結論別構成要素一覧

序論	本論	結論
1.背景説明	4.データ提示	7.結論提示
・テーマ説明	・客観的データ提示	・全体のまとめ
・用語説明	・データ出所の明示	・今後の展望
2.問題提起	5.解釈, 考察	
・問題点の指摘	・独自の解釈内容	
3.研究行動の概説	・深い考察内容	
・今後何について考え、述べるのか	6.意見提示	
・研究目的の提示	・解釈や考察をもととした自身の意見提示	

表2. 評価シート

序論	本論	結論
1.背景説明	4.データ提示	7.結論提示
/3	/3	/3
2.問題提起	5.解釈, 考察	総合
/3	/3	
3.研究行動の概説	6.意見提示	
/3	/3	/21
備考		

## 4. 実践内容

### 4.1. 調査対象

対象授業，対象者は，2022年度前期授業「日本語Ⅰ」を受講し，日本語を母語とする初年次学生60名である。

### 4.2. アウトラインシート の設計，使用

文章を書くことが苦手と回答した学生に聞き取り調査を実施したところ，「何から書き始めたら良いのか分からない」，「書いているうちに頭が混乱して纏まらなくなる」等の意見が挙がったことにより，長い文章を書き始める前に，一度，頭の中にある自身の考えを整理し，可視化する必要があると考えた。そこで，これから何をどのように書いていくのかを序論・本論・結論別に文字化できる「小論文アウトラインシート」（表3）を作成し，2回目の授業以降，小論文を書き始める前の準備段階として，アウトラインシートを作成する時間を設けることとした。

### 4.3. 授業内容

以下，対象とした小論文記述に関する6回の授業内容を示す。

1回目の授業は，担当教員が小論文を書くための基礎知識として，論文の構成（序論・本論・結論）や，引用表現や参考文献の書き方を説明し，その後，受講学生に身近な「若者言葉の是非」という，比較的書き易いと思われるテーマで800字程度の小論文を執筆し，提出させた（小論文①）。

2回目の授業では，小論文全体の構成要素（序論・本論・結論に何を書くべきなのか）について，例文を交えながら詳しく説明した。また，先述の評価基準を明示し，どのような内容が評価されるのかを理解させた。その後，世界的目標SDGsの一つである，「質の高い教育をみんなに」というテーマで800字程度の小論文を書き始める前の準備段階として，「小論文アウトラインシート」を記入する時間を設けた。

3回目の授業では，前回の授業で記入済みの「小論文アウトラインシート」をもとに，テーマを「質の高い教育をみんなに」として，800字程度の小論文を執筆させた。

4回目の授業では，書き終わった小論文を推敲し完成させて提出させた（小論文②）。

5回目の授業では，世界的目標SDGsにある，「エ

ネルギーをみんなにそしてクリーンに」というテーマで800字程度の小論文を執筆する前の準備として，「小論文アウトラインシート」を記入し，アウトラインシートの記入終了後，論文を執筆させた。

6回目の授業では，書き終わった小論文を推敲し，完成させて提出させた（小論文③）。その後，授業終了後に事後アンケートとして学修の振り返りを行った。

表3. 小論文アウトラインシート

テーマ	
序論	問題提起:テーマに関連する問いを提示 1.背景説明 2.問題提起 3.研究行動の概説
本論	客観的根拠:根拠を提示しながら議論を展開し、結論を導く 4.データ提示 5.解釈、考察 6.意見提示
結論	自身の意見、主張:問いに対する答え、今後の展望など 7.結論提示
参考文献	

4.4. 事後アンケート，学修の振り返りの内容  
授業終了後の学修の振り返りとして，いくつかの質問をすることとした。

質問1：授業で小論文やレポートの書き方を学ぶことができたと思いますか。

質問2：授業を受けたことによって小論文やレポートの書き方が身に付いたと思いますか。

質問3：授業を通じて，小論文やレポートを書くことに興味を持てるようになったと思いますか。

質問1から質問3に，「とても思う」，「思う」，「あまり思わない」，「全く思わない」から選択して回答することとし，最後に，授業における自身の学修に関する振り返りについて，自由に記述してもらったこととした。

## 5. 結果・考察

### 5.1. 構成要素に関する結果

表4は，小論文3編の教員評価の総合点において，小論文①と小論文②，小論文②と小論文③とで，その差が統計的に有意か確かめるために，有

意水準 1%で対応のある *t* 検定 (両側検定) を施したものである。表 5 は、小論文 3 編における序論・本論・結論別構成要素の有無 (出現数, ポイント) を一覧にしたものである (表 5 中の構成要素については、背景: 背景説明, 問題: 問題提起, 行動: 研究行動概説, データ: データ提示, 解釈: 解釈, 考察, 意見: 意見提示, 結論: 結論提示, としている)。なお、受講学生は 60 名だが、授業欠席者を鑑み、*n*=58 としている。

表 4. 評価結果 (n=58)

初回平均値 (標準偏差)	2 回目平均値 (標準偏差)	差 ①-②	<i>t</i> 値
8.19① (5.80)	12.26② (4.69)	-4.07	-2.83*
2 回目平均値 (標準偏差)	3 回目平均値 (標準偏差)	差 ②-③	<i>t</i> 値
12.26 (4.69)	15.98③ (3.83)	-3.72	-3.33*

\**p*<0.01

表 5. 構成要素の出現数・ポイント結果 (n=58)

	構成要素	初回		2 回目		3 回目		上昇値 ②-①
		出現数	ポイント ①	出現数	ポイント	出現数	ポイント ②	
序論	背景	58	106	58	137	58	162	+56
	問題	27	55	58	110	58	150	+95
	行動	27	49	44	80	53	101	+52
本論	データ	58	86	58	124	58	149	+63
	解釈	27	48	44	79	53	100	+52
結論	意見	58	80	58	94	58	117	+37
	結論	27	51	44	87	58	148	+97
	平均値	4.86	8.19	6.28	12.26	6.83	15.98	+7.79

## 5.2. 構成要素に関する考察

表 4 より、小論文①と小論文②、小論文②と小論文③の平均値の差は有意であることが分かった。これにより、授業を通じて学生が小論文で記述す

べき構成要素を理解し、文章で表現できるようになったことが統計的に示唆された。

また、表 5 より、小論文①から小論文③にかけて、全ての構成要素の出現数とポイントの上昇を認めることができた。以下にその詳細を考察する。

小論文①の最高は 20 ポイント、最低は 3 ポイントと、内容の良し悪しに、かなりの個人差があったものの、序論の背景説明、本論のデータ提示、本論の意見提示は全員記述できていた。このことより、これらは学生にとって理解しやすく、表現しやすい構成要素であったと言える。特に、序論の背景説明については、書かれている内容を一つずつ吟味しても初回から良く表現されており、ポイントが最も高い構成要素であった。

小論文②の最高は 20 ポイント、最低は 5 ポイントで、小論文①と比べて最低が 2 ポイント伸びた。また、全ての構成要素において、出現数、ポイントともに上昇しており、小論文アウトラインシートの効果の可能性が示唆された。特に、序論の問題提起は+55 ポイントと、大幅に向上していた。反対に、本論の解釈、考察においては 31 ポイントの伸びに留まり、学生にとって、客観的データのある程度解釈して簡単に述べることはできるものの、深く解釈しその内容を分かり易く明確に表現するのは困難を要することであると分かった。これより、より深くデータを解釈するための教育ツールの必要性が示唆されたと言える。

小論文③の最高は 21 ポイント、最低は 7 ポイントで、小論文②と比べて最高が 1 ポイント、最低が 2 ポイント伸びた。ここでも全ての構成要素において、出現数、ポイントともに上昇しており、小論文アウトラインシートの有効性が示唆されたと考えられる。特に、結論の結論提示が+61 ポイントと目立って伸びていた。反対に、本論の意見提示は 23 ポイントの伸びに留まり、学生にとって序論の流れを汲み取りながら本論で自身の意見を読み手に分かり易く述べることは難儀であるということが分かった。ここでは、私見を相手に正確に伝える力を身に付けるための協働学修の必要性が窺える。

小論文①と小論文③のポイントを比較し、特に上昇値が高かったのは、結論の結論提示 (+97) であった。ここでは、2 回、3 回と執筆を重ねることによって、学生の結論を導き文章表現する力が向上した可能性が示唆された。

5.3. 受講学生の主観的評価に関する結果  
学生の主観的尺度である事後アンケート、振り返り結果は以下となる(表6)。

表6. 事後アンケート・振り返り結果 (n=36)

	とても 思う	思う	あまり思 わない	全く思 わない
問1.論文の書き 方を学べた	52.8%	44.4%	2.8%	—
問2.論文の書き 方が身に付いた	33.3%	55.6%	11.1%	—
問3.興味が持て るようになった	16.7%	55.6%	27.8%	—

振り返り内容(一部抜粋)

【「小論文の書き方を学べた」に関連する内容】

・小論文を書くことが高校ではあまりなかったので苦戦しました。しかし、この授業を通じて書く能力が身に付いたので良かったです。

・将来、自分が働いた時に、小論文やレポートを書く時は、この授業を参考にして書いていきたいと思います。

【「アウトラインシートが役に立った」に関連する内容】

・小論文をまとめて短くして書く方法など色々知ることができて良かったです。そしてまずは直接書かないでアウトラインシートで簡単にまとめてから書いたら書きやすくなるなと思いました。

・小論文の組み立て方は高校で習ったことがありましたが、アウトラインシートでまとめたり、参考にした資料を書き留めておいたりはしてこなかったもので、とても参考になりました。

【「文章を書く機会」に関連する内容】

・今まで小論文を書く機会が少なかったので、練習の機会があるのがとても良かった。

【「文章を書くスピードが上がった」に関連する内容】

・高校の時よりも小論文を書くスピードのスキルが上がって良かった。

5.4. 受講学生の主観的評価に関する考察

事後アンケートの結果より、「とても思う」、「思う」の値が、質問1は97.2%、質問2は88.9%、質問3は72.3%と、文章を書くことへの嗜好性の高

まりは7割程度に留まったが、9割程度の受講学生が、「授業を受けて小論文の書き方を学ぶ事ができた」、「授業での学びで小論文の書き方が身に付いた」と回答していることより、学生は授業を通じてアカデック・ライティング力が身に付いたと実感しており、高い満足感を得ることができたと考えられる。

さらに、学修の振り返りに関する全ての記述内容は、授業を好意的に捉えるものであり、「小論文の書き方を学べた」、「アウトラインシートが役に立った」、「文章を書く機会に関するもの」、「文章を書くスピードが上がった」と、4つに大別され、授業内容の効果を認めることができたと言える。

## 6. まとめ

本研究では、小論文に記述すべき構成要素ごとの内容を予め可視化できる「小論文アウトラインシート」を用いて、初年次学生のアカデミック・ライティング授業を実践した。受講学生が授業内で執筆した3編の小論文全体の文章構造分析を行った結果、特に、序論「問題提起」において「小論文アウトラインシート」の効果が確認できた。

また、事後アンケート・振り返り結果や振り返り内容からも受講学生の授業満足度の高さが窺え、授業効果を認めることができた。

しかしながら、序論「問題提起」と結論は、執筆回数を重ねる度に明確に表現できるようになるものの、本論「客観的データ解釈や考察」、「自身の意見の提示」の表現内容に課題が残ることが示唆された。

本研究で明らかとなった上記の課題は、OECDのPISA2018読解力低下に関連するものであり、対策を要する事項である。今後は、これらの問題を克服すべく、読解力リテラシーを身に付けるための授業デザインの構築を思索すべきであると考え、今後の研究に繋げたい。

## 引用文献

- [1]浜田麻里ほか. 大学生と留学生のための論文ワークブック. くろしお出版, 1997, p.24-132.  
[2]脇田里子. 学部留学生の課題レポートの文章構造の分析. コミュニカーレ. 2012, 1, p.87-123.

---

**Abstract**

---

In order for students to be able to write academic texts, it is necessary for them to understand the framework that forms the basis of the entire text, the so-called introduction, main thesis, and conclusion, which are the components that should be written within the text structure.

In this study, we focused on these components, clarified the components that should be written in a thesis, and clarified how many of the necessary components are present in the entire thesis written by first-year students, as well as the characteristics and problems in the structure of the thesis by quantifying the content of the writing.

The analysis of the overall sentence structure of the three essays revealed that, although the introduction, "Problem Statement," and conclusion became clearer each time the essays were written, the main thesis, "Objective Interpretation and Discussion of Data," and "Presentation of Own Opinion," remained problematic.

These challenges are also linked to the decline in reading comprehension in OECD's PISA 2018, and we should ponder the construction of lesson designs to acquire reading literacy to overcome the challenges.

---

(受付日：2022年11月21日，受理日：2023年2月24日)

**杉本 亜由美 (すぎもと あゆみ)**

現職：金沢学院短期大学現代教養学科専任講師

成蹊大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得満期退学。  
専門は日本語教育，キャリア教育。